

## 原子力リスク研究センター（NRRC） 第 20 回 原子力経営責任者会議 議事録

1. 日 時：2025 年 5 月 14 日（木）13:00～15:00

2. 場 所：電力中央研究所（大手町本部）役員大会議室

3. 出席者：

主査：アポストラキス（NRRC）

委員：高橋（北海道電力、勝海代理）、佐藤（東北電力、青木代理）、  
福田（東京電力 HD）、大塚（中部電力、伊原代理）、  
中田（北陸電力、福村代理）、高島（関西電力、水田代理）、三村（中国電力）、  
川西（四国電力）、篠原（九州電力、林田代理）、釧田（日本原電）、  
松本（日本原燃）、萩原（電源開発）、朝岡（NRRC）

オブザーバー：大塚（電事連）、橋本（原安進、尾野代理）、魚住（ATENA）、メザ  
ーブ（NRRC）

幹事：谷川（NRRC）

陪席：米田、平木、渡邊、西村、中島、山田、津崎、齋藤、松井（NRRC）

4. 議 題：

### (1) 2024 年度 原子力リスク研究センターの研究成果

NRRC より、2024 年度の共有研究成果概要（資料 20-2）について説明を行った。  
また、リスク評価研究チームおよび自然外部事象研究チームからそれぞれ 1 件の  
主要な研究成果を報告した。

### (2) NRRC 活動状況

NRRC の活動状況のうち、RIDM チームの活動状況として、RIDM・PRA 教育  
に関する 2024 年度の実施状況と 2025 年度の実施計画について報告した。

### (3) 所長との意見交換

（所長の主な発言）

- 米国でのリスク情報活用規制の経験を踏まえて、規制者に対して 2 つメッセージがある。  
ひとつは、「決定論的な方法のみに基づいて物事的意思決定をするということは、知識につ  
いて大事な部分を見逃すということになってしまうということの意味している。」という  
ことである。よく PRA について言われるのは、PRA には不確実さがあるであろうとい  
うことであるが、もちろんその不確実さは存在するけれども、PRA というのはまさに確実さ  
を定量化するというアプローチだと思っている。もちろん決定論的なアプローチにも不確  
実さは存在する。
- 2 つ目のメッセージは、「リスク情報を使って事業者が独自に非常に合理的な活動をするよ  
うにすれば、これはオペレーションも安全についても、どちらも向上し得る。経済性と安  
全性、どちらも向上できる」ということである。

(顧問の主な発言)

- **RIDM** に関して残された障害が 2 つある。1 つ目が性能目標の策定がまだだということである。
- 2 つ目は、リスク情報の活用というのは、**NRA** としては規制を強化するという方向では歓迎するものの、規制を緩和するという方向に関しては非常に躊躇している感覚を持っている。**RIDM** で重要な点は、まずプライオリティ付けができるということ、これにより規制も、事業者も、重要なところにフォーカスできるようにすることが重要である。**RIDM** を使ってプライオリティをしっかりと定めることにより、規制を緩和する方向にも、また強化する方向にも、両方ともプライオリティをベースに動けるという考え方について、引き続きこれからも **NRA** と話しをしていく必要があるし、話をしていける土台に上ってきているのだと思う。

(委員からの主なご意見)

- 性能目標、安全目標の件に関しても、**OLM** のガイドラインの評価の中に値としては取り入れ、**NRA** と意見交換をしながら、今後進んでいくものと思っている。リスクインフォームドの規制もゆっくりかもしれないが進んでいく。そういう議論をしていく中で、日本の **RIDM** を進めていきたい。色々な規制にリスク情報を活用できるように進めていきたいと考えている。
- 関西電力として独自の性能目標を定めている。**RIDM** の考え方を発電所の所員一人一人、あるいは協力会社さんの一人一人まで、なるべく浸透させようということを今行っている。ゴールやターゲットではないが、メトリックスという考え方をしっかりと浸透させ、この数字だからいいということではなく、どこにフォーカスを当てるべきなのかを、発電所運用に当たり **RIDM** の文化をしっかりと根付かせていきたい。